

黒馬の花嫁

～気高き理性が快楽に溶ける、
獣の燃料と化した女戦士の至福～

【安心の純愛♡】

【馬とやっちゃう♡】

【機械姦もあるよ♡】

【オルガ・ファンタジー】シリーズ

魔力（オルガ）を狙われ、肉体の奥底まで犯され尽くす
絶望と凌辱のハードエロス・ダークファンタジー

著：XYZ_L

黒馬の花嫁



魔力（オルガ）を狙われ、肉体の奥底まで犯され尽くす

絶望と凌辱のハードエロス・ダークファンタジー

「オルガ・ファンタジー」シリーズ

著:XYZ_L

プロローグ:鉄血の調律

鉄血公国ガリアの首都、ブラッドクロウヴ。

その地下深くにある無機質な軍用厩舎は、焦げたオゾン臭と、むせ返るような雌の発情臭が不快に混ざり合っていた。

力こそ全て。

それが、この国の冷徹な国家哲学だ。

ガリアはその思想を体現する、2つの究極の兵器を擁している。

1つは、この国の血と鋼鉄を凝縮したかのような黒き鎧を纏う精鋭部隊『黒騎兵団』。

そしてもう1つが、古より存在するオルガデバイスを、女性の肉体を燃料とする「生ける兵器」へと変質させる、ガリア独自の非情な運用思想である。

私は自らの衣服を脱ぎ捨て、冷たい石の床の上に立った。

冷気に晒された私の四肢や腹筋は、過酷な軍事訓練によって無駄なく引き締まっている。

だがその一方で、莫大な魂の魔力を内包する生体ジェネレーターとしての豊かな双丘と、不自然なほど滑らかに広がる骨盤の曲線が、アンバランスなまでの雌の肢体を主張していた。

無表情な技官たちが、私の身体に漆黒のオルガギアを装着していく。

それは乳輪の境界すら隠しきれない極小の胸当てと、柔らかな股間の秘裂へと直接食い込む細い装甲紐だけで構成されていた。

豊満な胸元と、変容させられた股間を大きく露わにするその装甲は、決して男の劣情を煽るための産物ではない。

夜の冷気に晒され、無防備な乳首が硬く尖り立つ。

これは、魔力を極限まで効率よく放出するための機能美だ。

私の肉体と精神が、どれほどの絶望的な負荷に耐えうるかを示す、誇り高き機能の証明だった。

その運用思想により、ガリアには無数の生ける兵器が存在する。

身体にオルガデバイスを埋め込み、軍のために魔力を捧げる彼女たちは、『鉄血の戦乙女』と呼ばれていた。

私は、数多の戦乙女の中でも、最も過酷な任務を単独で遂行する孤独な兵士、クリスタ。

『黒騎兵团』に所属する兵士のほとんどは、『鉄血の軍馬』と『スティグマの鞍』による共生契約を結んだ精鋭で構成されている。

私は類稀なる魔力と、待機区画で荒い鼻息を漏らす相棒、漆黒の軍馬バルドゥスとの深い絆ゆえに、特別な二つ名を賜っていた。

『黒馬の花嫁』。

それは、私がバルドゥスに選ばれし者であり、互いの肉体と魂を共有する、最も深い共生関係にあることを示す称号だ。

「個体名クリスタ。これより、魔力回路の最終調律を開始する」

魔導拡声器からの無感情な声が響く。

私は見上げるほどに巨大なバルドゥスの背に飛び乗り、彼専用に使えられた『スティグマの鞍』に跨った。

通常の軍馬とは比較にならない圧倒的な体幅が、私の両脚を容赦なく左右へと限界まで割り開く。

オルガギアによって大きく剥き出しになった太ももの内側に、彼の分厚く強靱な筋肉のうねりと、内燃機関のような獣の熱が直接密着してきた。

私の身体は軍のために捧げられた兵器であり、獣の規格外の質量や、巨大な金属の楔を子宮で直接受け止めるため、魔力調整によって産道から柔らかな臀部、骨盤の構造そのものが根本的に作り変えられている。

バルドゥスが荒い息を吐くたび、その巨大な肺の震えが鞍を通じて私の骨盤を底から揺さぶる。

彼が魔力を求めて低く喉を鳴らしたのに連動し、鞍の中央から天を突くようにせり出した無機質な魔導抽出器が、私の無防備な秘裂に容赦なく押し当てられた。

「ッ……！」

無慈悲な太さと硬さを持つ、先端が丸みを帯びた冷たい金属の楔が私の肉をこじ開け、子宮の入り口まで一気に貫く。

内臓を力任せに押し広げられるような強烈な異物感と、骨盤が軋むような激痛。

私は黒騎兵団の精鋭としての矜持を保つため、奥歯を強く噛み締め、口の中に血の味が滲むほどに必死に悲鳴を殺した。

しかし次の瞬間、体内に埋め込まれたオルガデバイスがその致死的な苦痛を検知し、生体魔術の安全機構を強制的に作動させた。

「あ……っ！ ひ、あぁっ……！」

押し殺したはずの悲鳴は、瞬時にだらしのない甲高い喘ぎ声へと塗り替えられる。

肉体を切り裂くような激痛は、デバイスに組み込まれた強制変換術式によって、脳髓を真っ白に焼くような圧倒的な快楽へと強制的に書き換えられていく。

誇り高き兵士としての意志など、冷徹なシステムの前ではあまりにも無力だった。

『出力安定。魔力抽出術式、第二階層へ移行』

無機質な音声が響き渡る中、抽出器が私の奥深くで激しく脈動を始めた。

不気味な駆動音とともに、冷たい金属が熱を持った粘膜を執拗に擦り上げる。

魂の根幹から魔力が無理やり吸い上げられていく。

私は激しい快感に白目を剥き、首を大きく反らせて絶叫した。

「ひいっ！ いや、あああんっ！ お、おかしくなるうっ……！」

私の性器から溢れ出した愛液が、熱くどろりとした粘度を伴って鞍の表面を濡らしていく。

私はただの部品であり、バルドゥスを動かすための燃料タンクに過ぎない。

「ああ……っ、んっ……んんっ……♥」

限界を超えたオルガズムの波が、私の肉体を何度も激しく打ち据える。

体内から絞り出された莫大な魔力が、抽出器を経由してバルドゥスの巨体へと直接流れ込んでいく。

私の熱を飲み込んだ彼の漆黒の筋肉が鞍の下で異様に膨張し、熱波を放ちながら荒々しく躍動する。

装甲が赤熱し、凄まじい熱量となって密着した私の太ももを焼き焦がすように温めた。

『魔力回路の同調率、閾値を突破。生体魔力経路の結合完了』

『これより本作戦行動、聖都への潜入任務へと移行する』

技官の冷徹な宣言が、調律の終わりを告げた。

私は鞍の上で力なく四肢を投げ出し、絶頂の余韻でひくひくと痙攣を繰り返している。

だが、その瞳には明確な任務達成への意志が宿っていた。

私の肉体は、完全に彼を受け入れる兵器として仕上がっている。

バルドゥスが高く嘶き、蹄が重い音を立てた。

私たちは血と硝煙の匂いが立ち込める厩舎を抜け出し、新月の闇が支配する夜の森へと飛び出していった。

これより、聖都ヴァルキリアへの極秘潜入任務が始まる。

1. 夜陰の行軍、淫らなる鼓動

厩舎の重い扉を抜け、私たちは戦場の夜へと躍り出た。

むせ返るような血と硝煙の匂いに満ちた空間は、重苦しい静寂だけが支配している。

新月の深い闇が辺りを覆い尽くし、遠くで狼の遠吠えが虚しく響いていた。

ここはすでに、聖都ヴァルキリアの強固な魔力探知の結界網が敷かれた死地だ。

完全な静寂と、魔力の徹底した隠蔽のみが生還の条件となる、極秘の潜行行軍である。

私は、この鉄血公国ガリアが誇る『鉄血の戦乙女』の一人。

そして『黒馬の花嫁』の称号を背負う兵士、クリスタ。

私の相棒は、このガリアの大地で最も速いと称される鉄血の軍馬バルドゥスだ。

私は気高き兵士なのだと——必死に自分へと言い聞かせる。

バルドゥスは夜の闇に完全に溶け込み、蹄の音すら立てずに静かに森の中を進んでいく。

彼はただの獣ではない。

私の「敵に見つかってはならない」という緊迫した意思を、魂の接続を通じて完全に理解している。

私が手綱で指示を出すよりも早く、極めて高い知性で最適な隠密ルートを選び出しているのだ。

だが、その高度な隠密の軍略機動を維持するための代償は大きかった。

彼の力強い躍動に連動し、『スティグマの鞍』に固定された極太の金属の楔が、先ほどの調律以上に荒々しい角度で私の子宮口を執拗に抉り抜く。

彼は私が声を殺そうと耐えているのを完全に理解している。

それでも、この死地を最速で抜けるために、あえて容赦のない物理的な摩擦と刺突を与え、私から必要なだけの魔力を精密に引き出しているのだ。

その度に、体内に埋め込まれたオルガデバイスが激しく脈動する。

魂から抽出された魔力が暴力的な熱流となって、馬へと流れ込んでいく。

私はこの肉体がバルドゥスを動かすための燃料であり、腹の底から突き上げるこの強烈な快感が、任務を遂行するための代償であることを知っている。

理性がそれをただの「任務」だと割り切ろうと足掻く。

一方で、肉体は正直に快感に震え、内側から発情の熱を帯びていくのを感じていた。

私の身体は、鞍との激しい摩擦と強制的な快楽によってじっとりと汗ばんでいる。

魔力の放熱という機能美のために極小の装甲から完全に露出した乳房は、夜の冷気に晒され、乳首は不自然なほどに固く尖りきっていた。

その周囲の乳輪は、まるで全身の血潮が漲るようにほんのりと赤みを増している。

僅かな夜風の揺らぎにすら敏感に反応して、痛いほどだった。

「ひい...っ、あう...ん...っ！」

堪えきれずに漏れた吐息が、夜の冷たい空気の中に白い煙となって消えていく。

敵地で声を上げることは死を意味する。

私は強く歯を食いしばり、必死に喉の奥から這い出る恥辱の声を抑え込んだ。

だが、私の思考は絶え間なく押し寄せる快楽の波によって、次第にドロドロに溶かされていく。

兵士としての理性は霞んでいく。

ただ肉体だけが、バルドゥスとの魂の接続による一体感に深く溺れ落ちていった。

不意に、バルドゥスが低く喉を鳴らした。

その震えるような音は、この夜の闇の中で、まるで私を誘う獣の声のように聞こえた。

「お前ならまだ出せるだろう」と、相棒の限界を見透かしたかのような凄絶な要求。

鞍を介した規定の魔力抽出だけでは足りない。

私の体に宿る魔力を、さらに激しく求めているのだと本能的に理解できる。

彼の荒い呼吸が、汗ばんだ私の首筋に熱く吹きかかる。

バルドゥスは一瞬、太い首をこちらに向け、獣の熱を直接浴びせるように鼻息を荒く吐いた。

鞍から絶え間なく伝わる快感の物理的な共鳴が、私の身体を内側から激しく震え上がらせていた。

私はもはや、気高く彼を操る戦乙女などではない。

彼の知性と軍略的要請に屈し、ただその巨大な欲求を満たして魔力を搾り取られるためだけに存在する、卑しい雌に成り下がっていた。

2. 歪んだ儀式、肉体と魂の交わり

目的地である聖都の城壁が遠くに見える丘の上で、私は手綱を強く引き、バルドゥスを静止させた。

今夜の隠密偵察はここまでだ。

ここから夜明けを待ち、確実な潜入経路を特定する。

バルドゥスは歩みを止めたものの、その巨大な体は不自然なほどに激しい熱を帯び、白く泡立つほどの汗を全身から噴き出していた。

彼は、聖都の強固な結界を破るという軍略上の大任務を前に、更なる莫大な魔力を求めているのだ。

私は、密着していた鞍からゆっくりと降りた。

夜の冷たい風が、どろりとした愛液に濡れて露出した私の股間を撫で、快感の余韻で熱を持った肌がぶるりと粟立つ。

バルドゥスは私の顔に鼻先を擦りつけ、まるで私を愛撫するかのように、その大きくて分厚い獣の舌を私の頬に這わせた。

生臭く、熱く湿った感触に、私の身体はまた、びくりと痙攣した。

「.....もう、良いでしょう？ 少し休んで」

私の掠れた懇願に、バルドゥスは不満げに首を横に振る。

彼の瞳は、夜の闇の中で妖しく輝き、私を捕食しようと狙う獣のそれだった。

鞍を介した規定の魔力抽出では足りない。

私に直接、魂の接続を行い、生体魔力経路の限界を外すことで、自身の巨大な欲求を満たそうとしているのだ。

バルドゥスは私に背を向け、ゆっくりと、彼のペニスを夜の冷たい空気の中へとあらわにする。

それは、馬としての常識すら逸脱した、私の太ももほどの太さを持つ、暴力的なまでに巨大な肉の塊だった。

赤黒くうっ血した先端からは、粘つく大量の前滴がだらしなく糸を引いて滴り落ちている。

荒い呼吸のたびに、彼の口からは白く泡立った唾液がこぼれ落ちていた。

私はその規格外の光景と獣の生々しさに本能的な恐怖を覚え、全身を震わせる。

しかし同時に、肉体に刻み込まれた抗えない快感の予感に、身体がびくびくと卑しく痙攣してしまう。

私は、彼という究極の兵器の維持の作法を痛いほどに心得ている。

任務の成功には、絶対に彼の機嫌を損なうわけにはいかない。

それが『黒馬の花嫁』として、私に課せられた、もう一つの凄惨な任務だった。

バルドゥスが圧倒的な熱を帯びたその巨体を、容赦なく私へと押し付けてきた。

私は彼の暴力的な熱と重みに押しつぶされそうになりながらも、両手を冷たい地面につき、自ら腰を高く持ち上げる。

それは力ある獣に捧げられる無防備な雌の姿であり、限界出力を超える生体魔力経路の直接結合を行うために私が編み出した、唯一の儀式だった。

顔を上げ、夜空に輝く無数の星を見つめる。

「...っ！ あ、あああ……！」

彼の巨大な先端が、私の性器にゆっくりと、しかし確かな質量と圧倒的な力で押し付けられる。

それはひどく硬く、熱く、そして獣の放つどろりとした粘液に濡れていた。

人間の雌が到底受け入れられるはずのない太さが、私の肉を強引にめくれ返らせながら侵入を開始する。

私の肉体は悲鳴を上げ、内臓が物理的に圧迫される。

敏感な陰核が彼の太い肉棒に押しつぶされ、潰れたゴムのようにねじれ上がる。

その奥にある私の膣は、まるで小さな肉袋のように、彼の全てを受け入れようと本能的な恐怖に震えながらも、自ら卑しく開いていくのを感じた。

そして、バルドゥスのペニスが、私の子宮口を無慈悲に押し広げ、最奥へと侵入していく。

人間の骨格が耐えうる限界を超えた暴力的な質量。

その瞬間、私の下腹部が、まるで彼の肉棒の形に合わせて、外側からでもはっきりと分かるほどに異様に膨らみ始めた。

内臓が、子宮が、限界を超えて押し広げられ、形を変えていく。

極限まで薄く引き伸ばされた皮膚、その下をどくどくと脈打つ血管が、月明かりの下ではっきりと見てとれた。

「あ、あう...！ ひ、ひぐ...！ いたいっ...！ お腹...っ、お腹が...っ、はち切れそう...っ...ひっ！」

肉体が引き裂かれる限界を告げる激痛。

だが、その痛みの向こうから、兵器としてクリトリスに打ち込まれた『魂の楔』が、生体魔術の安全機構を強制的に作動させた。

致死的な苦痛を相殺するため、大量の神経麻薬が脳髄を焼き尽くす。

鞍がもたらす一方的な抽出の快感とは次元の異なる、もっと深く、もっと魂の根幹を揺さぶる快楽の波が押し寄せてきた。

それは、バルドゥスという規格外の巨大な存在に内側から完全に支配され、征服されるという、究極の絶望と法悦だった。

「ひい...！ んん...っ、あう...っ、い、はい...っ！ おねがい...っ！」

いつしか抵抗の言葉は、自ら最奥を求める懇願に変わっていた。

私の身体は、自分の意志とは無関係に、彼の激しい動きに合わせて淫らに腰を揺らす。

そして、ついにバルドゥスの根元までが、私の奥深くへと完全に突き刺さった。

肉が裂けるような激しい痛みと、それを遥かに上回る狂氣的な快感の奔流が、私の全身の神経を完全に支配する。

休む間もなく、獣の執拗で暴力的な抽送が始まった。

浅く抉るような動きから、一気に最奥を突き上げる深い刺突へ。

獣はより効率的に魔力を引き出すため、本能的に最適な角度を探り、私の子宮口を正確に、何度も何度も容赦なくノックし続ける。

「ああ...っ、ん...んっ...！ やだ...やめっ...！ もう...っ、もうだめえ...！ あああ...♥」

彼が奥を激しく突くたびに、私の中の肉が乱暴に捲れ返る。

白く泡立った獣の汗が私の背中に滴り落ち、太い尻尾が荒々しく夜空を打つ。

毛深い巨体が私の柔らかな臀部に打ち付けられる重い水音が、夜の荒野に絶え間なく響き渡っていた。

物理的な時間は短いはずの儀式だった。

だが、生体魔術による時間感覚の麻痺が、この狂乱を永遠に等しい長さへと引き伸ばしていく。

私の全身が快感と絶望の波に激しく揺さぶられ、大きく痙攣する。

肉体と気高い精神が、バラバラに引き裂かれていくような感覚。

獣の終わりのない連続絶頂によって、私の意識は白く飛んだ。

だらしなく開いた口からは幾筋もの涎が垂れ、意志とは無関係に温かい尿までもが太ももを伝ってこぼれ落ちていく。

兵士としての尊厳など跡形もなく破壊され、脳の命令ではなく、脊髓反射と生殖本能だけで肉体が駆動し始める。

意識が途切れているというのに、私の腰は肉体に刻まれた『制御の聖印』の命令によって勝手に獣の抽送を迎えに行き、子宮が自ら精液を飲み込もうと卑しく蠕動を繰り返していた。

限界を超えて開かれた生体経路を通じ、自身の魂の魔力がとめどなくバルドゥスへと吸い上げられていくのを感じる。

任務のため、彼という兵器を維持するため、そして、この歪んだ儀式を終わらせるために。

私はただひたすらに、彼の底なしの欲求を満たすことだけに専念する。

やがて、バルドウスが夜空に向けて大きく、ヒヒン！と嘶いた。

それは戦場に響く咆哮でも、ただの獣の鳴き声でもない。

まるで、夜の闇に捧げられた勝利の歌のように、高らかで、力強い響きだった。

その刹那、私の脳裏に、夜空の星々が砕け散るかのような眩い光が弾け飛ぶ。

肉体は究極の絶頂の波に支配され、激しく痙攣を繰り返す。

それは私がこれまでに経験したどんな快感とも比べ物にならない、魂の奥底までを焼き尽くす圧倒的なオルガズムだった。

バルドゥスの巨大なペニスが、熱く、白濁した液体を私の内側へととめどなく注ぎ込んでいく。

それは彼が極限まで圧縮した、超高密度の魔力の結晶であり、双方の魔力循環が完了した証だった。

射精は一瞬では終わらない。

何十秒にもわたって、すさまじい脈動とともに致死量の熱が注ぎ込まれ続ける。

私の下腹部は、まるで妊娠したかのようにパンパンに膨れ上がり、皮膚の下を走る血管が狂ったように脈打っていた。

暴力的なまでの精液の奔流に、私の腹部が外側から見てわかるほど波打ち、形を変える。

熱く、ひどく甘い匂いを放つ体液が私の膣のキャパシティを超えて溢れ出し、震える太ももを伝って冷たい地面へと滴り落ちていく。

長大な射精を終え、バルドゥスは完全に満足したかのように、ゆっくりと彼の巨大な楔を私の中から引き抜き、その場で静かに草を食み始めた。

私は両手を地面についたまま、腰を突き上げた卑猥な姿勢で白目を剥き、しばらく身動きすらとれなかった。

開ききった性器からは、彼の溢れるほどの精液がまるで小川のように流れ出し、土を濡らして大きな水溜まりを作っていく。

極限の快感と激しい疲労が私の身体を完全に支配し、一切の思考を停止させていた。

『鉄血公国ガリア:特務騎獣バルドウス 運用仕様書』

鉄血公国ガリアの精鋭『黒騎兵団』において、最も過酷な単独任務に投入される究極の生体兵装。女性の肉体と快楽を燃料とする、狂った合理性の結晶である。



1. 機体概要:『特務騎獣バルドウス』

- 【スペック】:体高210cm / 体重1200kg超 / 全長320cm
- 【素体と改造】:通常の馬を素体とし、極限の魔導技術で生体改造を施された規格外の巨獣。見上げるほどの圧倒的な体幅と質量を持つ。
- 【知性と本能の変質】:乗り手(クリスタ)の思考や絶望を「魂の接続」を通じて完全に理解する高度な知性を持つ。一方で、通常の生殖本能は失われており、代わりに戦乙女の「魂の魔力(オルガエネルギー)」を貪る残酷な『捕食本能』に支配されている。

2. 持続的魔力抽出機構:『スティグマの鞍』

長時間の隠密行軍などに用いられる、持続的かつ安定した魔力供給システム。

- 【抽出の術式】:鞍の中央からせり出した無機質な魔導抽出器(杭)が、戦乙女の秘裂をこじ開け、子宮の入り口まで容赦なく貫く。
- 【安全機構の反転】:歩みのたびに内臓を抉る激痛は、戦乙女の体内に埋め込まれた『生体魔術の安全機構』によって、脳髓を焼く圧倒的な快楽へと強制変換される。彼女が絶頂に悶えることで、規定の魔力が安定的かつ持続的にバルドゥスへと供給される。

3. 限界突破の儀式:『生体魔力経路の直結』

強固な結界の破壊など、鞍の規定出力を超える莫大なエネルギーが必要な際に行われる、最終戦術(オーバーブースト)。

- 【直接の交わり】:デバイスという媒介を捨て、戦乙女の太ももほどの太さを持つ暴力的な生殖器を、無防備な子宮の最奥まで直接ねじ込む。
- 【双方向の魔力循環】:肉体が引き裂かれる苦痛と究極の快楽の狭間で、戦乙女の魂が空っぽになるまで魔力を搾り取る。その後、バルドゥスが極限まで圧縮した特殊な『魔力の結晶(精液)』を子宮に還流させることで、次なる爆発的な作戦行動のためのエネルギー充填が完了する。

4. 専用搭乗者:『黒馬の花嫁』クリスタ

バルドゥスの規格外の質量と魔力要求に耐えうるよう、骨盤の広がりから豊かな双丘まで、完全に「兵器の器」として最適化された上級戦乙女(クローネ)。彼らの関係は愛でも友情でもなく、圧倒的な支配と依存が入り混じる『歪んだ共生』によってのみ成り立っている。

作品名 : 黒馬の花嫁

発行日 : 2026年6月7日

発行者 : XYZ_L

連絡先 : <https://bsky.app/profile/xyz0080.bsky.social>

【注意事項】

本作には強度の尊厳破壊、生体部品化、および救いのない結末などの過激な表現が含まれております。フィクションとしてお楽しみいただける方のみご閲覧ください。

【AI生成技術の利用について】

本作の表紙および挿絵などの画像は、AI画像生成技術を利用して出力したものをベースに、加筆修正やレイアウト調整を行って作成しております。

【禁止事項】

本作のテキスト、画像を含む一部または全部の無断転載、複製、改変、Web上への無断アップロード（SNS、動画サイト、ファイル共有サイト等を含む）を固く禁じます。
